

算数科

算数科における指導の重点(身に付けさせたい力) ※学習指導要領に照らし合わせて	
ア 知識及び技能	イ 思考力、判断力、表現力等
整数、小数及び分数の計算をしたり、図形を構成したり、長さや重さを測定したり、図形の面積や体積を求めたりすることなどについての技能を身に付ける。	数とその表現や数量の関係に着目し、目的に合った表現方法を用いて数の表し方や計算の仕方などを考察する力を身に付ける。

	児童・生徒の学力の状況(課題)	授業における具体的な手だて	手だての実施時期	成果検証(2月)
第1学年	<ul style="list-style-type: none"> 数の基礎的な理解に、個人差が見られ、個別に支援が必要な児童がいる。ア 文章問題を自分で読み取って、考えることに対して苦手意識をもっている児童が見られる。イ 	<ul style="list-style-type: none"> ノート指導では、ICT 機器を活用することで、どの児童にも分かりやすいように書き方の指導をする。計算問題では、朝学習や宿題等で繰り返し練習を取り入れ、定着を図る。ア 文章問題では、問題場面がイメージしやすくなるように ICT 機器を活用し、問題場면을視覚的に捉えさせることで問題解決につながるようにする。イ 	通年 通年	<ul style="list-style-type: none"> ノート指導では、ICT 機器やマス目入り黒板などを活用することで、式や図を分かりやすく表現できるようになってきた。また、基本的な計算問題では、プリント学習やタブレット端末を使用して、繰り返し練習問題に取り組むことで、理解を深めることができた。ア デジタル教科書を使用し、実際に動かしたり数えたりすることに加え、図で表現させることで、問題場면을具体的に捉えられるようになった。イ
第2学年	<ul style="list-style-type: none"> 加減の基礎的な計算(繰り上がり、繰り下がり)を暗算でできない児童が一定数いる。ア 自分の言葉で考え(数の表し方や、計算の仕方など)ノートに書いて表現することに課題のある児童がいる。イ 	<ul style="list-style-type: none"> 導入で前時の振り返りを行い、前時の学習をいかせるようにする。また、算数の木(既習事項を集めた掲示資料)を活用して、既習事項を活かせるようにする。ア 定着度の低い児童には、担任の机間巡視による指導、支援員によるサポート等に関わる支援を重点的に行う。イ 	通年 通年	<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて、既習内容を復習させたり、単元終了後も繰り返りかえり問題に取り組ませたりすることで、計算の技能が定着してきた。ア PT に重点的に支援を行ってもらい、自分の考えを図や言葉で表すことができる児童が増えてきた。イ

<p>第3学年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・かけ算やわり算といった計算技能の定着に習熟の差が見られる。ア ・文章問題や応用問題になると、自分の考えがうまく表現できなくなってしまう児童がいる。イ 	<ul style="list-style-type: none"> ・問題場面がイメージしやすくなるようにICT機器を活用し、問題場면을視覚的に分かりやすくすることで問題解決につながるようにする。ア ・授業中の机間指導を充実させ、苦手意識をもっている児童に重点的に関わり、学習内容の定着を図る。また、朝学習の時間を活用し、基本的な計算技能の定着を図る。イ 	<p>通年</p> <p>通年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な計算技能の定着に向けて、日々の家庭学習で計算ドリルに取り組むなど、反復学習を行った。計算技能が少しずつ向上しつつある。ア ・ICTを活用して、問題場면을提示したり、児童の考えや図を視覚的に共有したりすることで、自分のノートに図をかいて説明することができる児童が増えてきた。イ
<p>第4学年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業で身に付けた四則計算の技能の定着に差がある。ア ・既習事項を活用して問題を解くことに課題がある。イ 	<ul style="list-style-type: none"> ・タブレット端末を利用したドリル問題に取り組む時間を設定し、問題を解く量を増やすことで計算技能の定着を図る。ア ・単元に関わりのある問題を授業のはじめに解くなど、導入部分で既習事項の復習をする。また、問題を解く際に既習のどの部分を活用しているか気付かせる。イ 	<p>通年</p> <p>通年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・隙間時間にタブレット端末を活用したドリル問題に取り組むことで、計算力が高まってきた。今後は、角度を測ったり作図したりする際の技能も高めていく必要がある。ア ・授業の導入段階で、既習事項を活用する問題に取り組むことで、本時に扱う学習内容を理解できる児童が増えてきた。今後も継続して取り組んでいく。イ
<p>第5学年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・作図、計算などの方法が丁寧でなかったり、定着していなかったりする児童が多い。ア ・計算処理に時間がかかる児童が一定数いる。ア ・既習事項を活用し自分の考えを表現できる児童が少ない。イ 	<ul style="list-style-type: none"> ・机間指導で理解が定着していない児童を確実に把握することで、個別指導を行い、基礎基本の定着を図る。ア ・単元の終盤に知識を定着させるための時間の確保を行う。ア ・単元内で自分の考えを表現する機会を増やし、1つの手段だけでなく、式と言葉を結び付けたり、式と図を結び付けたりするなどの考えを取り上げることで様々な考え方を理解できるようにする。イ 	<p>通年</p> <p>通年</p> <p>通年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・作図や計算が定着しない児童を授業で把握し、個別にゆっくりと指導する機会を休み時間や放課後につくることで、少しずつ基礎基本の定着がみられた。ア ・計算や既習の計算問題に定期的に取り組むことで計算技能が定着してきた。ア ・考えを表現する際に数直線

				や図など様々な例を出すことで、自分の考えに合った表現方法を選びながら表現することができるようになった。【イ】
第6学年	<ul style="list-style-type: none"> 知識・技能の定着に差が見られる。【ア】 2つの量の関係を捉え、正しく立式することに課題がある。【イ】 	<ul style="list-style-type: none"> 毎時間5分程度、復習の時間をとり、全員が理解していることを確認した上で、本時の学習に入る。【ア】 数直線や図などを用いて、2つの量の関係性を確かめてから立式するように指導する。【イ】 	<p>通年</p> <p>通年</p>	<ul style="list-style-type: none"> 継続的に振り返りを行わないと、忘れてしまう内容もあり、繰り返しの学習が必要であると感じた。【ア】 導入で前時の復習やまとめて出された課題を提示することで思考のつながりを意識させることができた。【ア】 家庭での取り組みに差があり、個別の対応が必要であった。【ア】 東京ベーシックドリルやミライシードなどに取り組み、習熟を図ることができた。【イ】

■「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた一人一台端末等 ICT の効果的な活用について	■学習の見通しをもたせることや学習を振り返ることの工夫等、「学びに向かう力」の育成に向けた取組について
<p>1年：ロイロノート等を使い自分の考えをまとめ、学級全体で共有できるようにし、多様な考えに気付けるようにする。【重点：協働】</p> <p>2年：学力に応じて問題数を調整することができるようにするなどの配慮をし、個別の支援を充実させていく。【重点：個別】 ロイロノートの提出機能を活用することで、意見を比較し、いろいろな考えがあることに気付くことができるようにする。【重点：協働】</p> <p>3年：ロイロノートを使い、児童の意見を取り上げる。【重点：協働】 タブレットの学習機能を活用して書く児童の課題や進捗状況に応じた課題を設定する。【重点：個別】</p> <p>4年：タブレット端末の計算ドリルを活用し、自分が苦手とする単元の復習がいつでもできる環境を整える。【重点：個別】</p> <p>5年：タブレット端末を活用し、ノート等に記録した問題解決の方法（図や表、式など）を写真に撮り、児童同士で共有し、分類・整理して話し合う。【重点：協働】</p> <p>6年：自分の考えをもち、表現できるように解決の見通しをもたせる。考えの発表では、ロイロノートやタブレット端末でノートに表した考えを黒板に映し、複数の考えや式などを比較しやすい場を設定する。【重点：協働】</p>	<p>1年：学習のめあてを児童と共に考えたり、学習のまとめやポイントを教室に掲示したりすることで、次時への意欲につながるようにする。学習の見通しを示すことで、主体的に学習に取り組めるようにする。</p> <p>2年：自分の考えや分かったことなどの振り返りを書く時間を確保する。本時の学習の流れを提示し、児童が見通しをもって授業に参加できるようにする。</p> <p>3年：既習事項を確認することで、学習内容のつながりに目を向けさせるとともに、問題解決型の学習の後には、学習感想を書かせるようにする。</p> <p>4年：タブレット端末の計算ドリルを活用し、自分が苦手とする単元の復習がいつでもできる環境を整える。</p> <p>5年：学習のまとめを、めあてに対して児童の言葉で振り返りを表現する。難しい場合も穴埋めなどにし、少しずつ書けるように促す。</p> <p>6年：学習問題から、児童が意図をもって取り組めるめあてを設定する。振り返りでは、めあてに対応して何が分かったのか、自分自身の言葉でまとめられるように繰り返し指導する。</p>

